

連絡会ニュース

子どもと教育・くらしを守る広島県立学校教職員連絡会

No.1275 2024/02/15 (Thu)

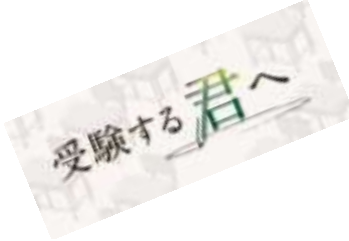
発行 広島高校連絡会事務局

Email renraku-kuko@mx6.tiki.ne.jp

HP <http://ww6.tiki.ne.jp/~renraku-kuko/>

携帯 090-1180-7644 (村井義幸)

090-9738-8264 (望月照巳)



しがない受験生からの ～自伝的回想～



朝日新聞が「受験する君へ」と題して、著名人からのメッセージを連載している。若い世代ほど目的意識を強く持って受験にのぞんでいる“かっこよい”姿が見える。50年以上前の受験生には“まぶしい”ばかりである。その中でラサール石井が「世の中ほど甘いものはない。何回でもやり直せるからガンバレ」という言葉を紹介している。この言葉が気に入って、しがない受験生だった自分のことを書くことにした。

しがない受験生の頃 ♪受験生ブルース♪

高石ともやの「受験生ブルース」。1970年前後に受験生だった人は誰しも口ずさんだ歌である。

私の受験時代が、この歌のようだったかは別として、“ブルース”であったことは間違いない。将来なりたいものもなく、“キャンパスライフ”へのあこがれ

おいで皆さん 聞いとくれ
ボクは悲しい受験生
砂をかむよな味気ない
ボクの話しを聞いとくれ

(セリフ)
今晚は英文法 テキスト
は58ページを開いてください
それではコガラシウジロウ先生
お願いいたします

(セリフ)アドリブを一発一
マージャン狂いの大学生
泥棒やってる大学生
八年も行って大学生
どこがいいのか大学生

もイメージもなく、
だからといって何の
取り柄もない自分
は、とりあえず高校
時代は勉強だけはし
ておこうぐらいの意
識であった。完全

朝は眠いのを起こされて
朝めし食わずに学校へ
一時間目が終わったら
無心に弁当たべるのよ

母ちゃんも俺を激励する
一流の大学入らねば
私じゃ近所の皆様に
あわせる顔がないのよ

一結論でございます一

大事な青春むだにして
紙切れ一枚に身をたくす
まるで河原の枯すすき
こんな受験生に誰がした

“夜型”人間だった
私は、旺文社のラジ
オ講座を聴くといっ
て親にSONYのイ
レブンブラックを買
ってもらった。でも
ラジオ講座は森野宗

屋は悲しや公園へ
行けばアベックばかりで
恋しぢゃならない受験生
ヤケのヤンパチ石投げた

テストが終われば友達に
ぜんぜんあかんと答えとき
相手に優越感与えておいて
後でショックを与えるさ

一フロックもついてるよ一
勉強ちっともしないで
こんな歌ばかり歌ってるから
来年はきっと歌ってるだろ
予備校のブルースを

夜は悲しや受験生
テレビもたまには見たいもの
深夜映画もがまんして
ラジオ講座を聞いているよ

ひと夜ひと夜にひとみごろ
富士山麓にオウム鳴く
サインコサイン何になる
俺らにや俺らの夢がある

明の古文と寺田文行の数学だけで、もっぱら深夜放送オールナイトニッポンと“仲良し”だった。こんな調子だから高校3年の後半には授業中眠たくって、成績も思うように伸びなかった。

札幌オリンピックに「連合赤軍」の浅間山荘まで2もり事件の1972年 某国立大に合格するも「中退」その後「早稲田」へ

受験本番の1972年2月といえば札幌オリンピック「日の丸飛行隊」で盛り上がり、その後浅間山荘事件をテレビは連日報道していた。受験に集中できるわけもなく、3月1日の卒業式もそこそこに玉砕覚悟で3月3日の国立大学受験に向かったことを覚えている。「赤本」では全くできなかった数学が、ほぼ完璧にでき、結果思いもよらず某国立大学に合格してしまった。だが、こんな受験生意識だから、大学入学後も、他の入学生とは一周遅れぐらいの意識で、アルバイトの味だけは覚え、だんだん大学から足が遠のき、結局“居場所”もなくなり「中退」という履歴を刻んでしまった。数ヶ月ふらふらした生活をしてきたが、大学というルールから外に飛び出す甲斐性もなく、国立大学の授業料36000円に対し、早稲田の授業料12万円、家



庭教師のバイトが月 25000 円の時代。「これぐらいなら何とかなるかも」程の気持ちで早稲田大学を受験。問題集と同じ問題が出題されるという超幸運にも恵まれ、合格することができた。



「憲法サークル」に入り浸り、就職は「でも・しか」先生でスタート

それでも、私の甘い意識は基本的に変わらず、早稲田で何かやりたいということもなく、もうこれ以上親に迷惑をかけられないことだけを胸に大学生活をスタートさせた。4月法学部のラウンジで部活の新歓の店が並び、その中の憲法を学ぶサークルに引っかかってしまった。憲法を勉強したかったわけでもなく、超マンモス大学の中で、薄暗かったが部室があるということが気に入った。1年生から4年生まで部員が二十数人という小所帯ではあったが居心地は良く、4年間の私の居場所になった。4年生の就職活動をするシーズンになっても中途半端で、会社訪問も途中でやめ、大手のマスコミの試験も撃沈し、結局学校の先生になった。「保険」でとっていた教員免許が役に立った。私は“でも・しか”先生のカテゴリーに入ることは間違いない。教師になってすぐに「憲法より拳法を」ならっておけばよかったと本気で思った。授業も落ち着かず、いつも生徒とけんかしていた、クラス担任になって授業をサボった生徒を夜呼び出して教室で二人っきりで話したこともある。家出した生徒を深夜捜し回ったことも。「やっぱり自分はダメなんだ」とつぶやいた不登校生徒に何もしてやれない自分に涙したこともある。自分の「生徒時代」にはありえなかった経験を通して「先生」になっていたと思う。

「受験する君へ」～教師として

私は海田高校でも、広島皆実高校でも、呉宮原高校でも他の教員以上に国公立大学をめざして生徒を叱咤激励し、教科指導だけではなく、小論文や面接指導も熱心にやり、合格すればともに喜び、ダメだったら共に悔しがった。学校として国公立大学合格者数を上げることも大切だと考えていたが、何よりも生徒たちが、今の課題に一生懸命取り組むこと、そして少しでも高いところをめざせば違った景色が見える経験の大切さを強調していた。どんな景色が見え、それをどうするかはそれぞれの生徒の問題だと思うが、自分の受験生時代は全然手本にはならなかったが、がんばったことで無駄になることは一つもないことはわかってほしかった。実際受験勉強で一生懸命覚えた世界史や日本史の知識が、大学時代に読んだマルクス、エンゲルスの本の理解にピースがはまっていくように役立ったことを覚えている。もちろん今はマル・エンなど“忘却”の彼方であるが…。

受験生たちへの大人の責任とは…

まじめに懸命に頑張る受験生たちに応える責任が大人にはある。親として、学校の教員として、学校、教育委員会、文部科学省、そして社会全体の責任が求められる。大学入試共通テスト、高校入試直前に起こった今回の能登半島地震。被災した受験生たちが安心して受験できる環境を整える大人の対応が問われるのは当然である。

何よりも「大人」の責任は、公平で公正な受験制度を用意し、生徒たちを正當に評価し、可否判断してやることである。数年前に多くの私学の医学部が、女子受験生の得点を減じて合格するべき女子受験生を不合格にしたことがあった。まったく論外で厳しく指弾されなければならない。大学入学共通テストに記述式問題と英語の民間試験の導入も大問題になった。当時の文科相の萩生田光一は「身の丈で受ければいい」と端から「公平」「公正」など意に介しない発言をしていた。昨年から行われている東京の都立高校入試の英語スピーキングテストも「まわりの生徒が解答する声が聞こえ、なにをいっているかわかった」という実態も報告され、ずさんな運営で大きな批判を受けている。頑張っている受験生に応える受験制度は、「公平」で「公正」であることは最低限の条件である。

広島県高校入試の「自己表現」は一刻も早くやめるべき！

広島県の公立高校入試の「自己表現」が2年目を迎える。この「自己表現」の問題点について連絡会ニュースでも何度も指摘してきた。昨年度各高校でどのように実施、運用されたかは別として、平川教育長の「やっちゃいました」的な軽い乗りで導入された「自己表現」の制度は、「公平」「公正」という点で問題がある以上に、そもそも受験制度として「不適切」だと思う。20歳になっても自分が何ものかも認識できず、自分がなにをやりたいのかわからないどころか考えたこともなかった私にとっては、「悪質さ」さえ感じる。

県教委のうたい文句を確認しておく。15歳で身につけておいてほしい力として「自己を認識し、自分の人生を自分の意志で選択し、他人に適切に表現する力」を入試で見ようというもの。「自己PRとは異なる」、部活の実績や話し方のテクニックは評価の対象ではないという。

この3つの力が大切だということはわかる。でもそれをなぜ15歳までに身につけなければいけないのか、そもそも15歳でも18歳でも20歳でも、人それぞれの問題なのではないか。2つめに、この3つの力は、生きていく過程でさまざまな挫折体験や成功体験の中で考え育まれるものであり、小学校を卒業して間もない中学生にこんなことを求めること自体不適切。そして入試制度設計にも大いに問題がある。この3つの力はきわめて個別的で主観的なもの、そもそも人と比べら

れるものではないのに、それを点数化し相対化して合否の判定をしていく。しかも配点が学力試験6，中学校の調査書2，自己表現2の割合で，中学3年間地道に学習に努力した結果である調査書と同等に評価される。昨年各高校でどのように採点され数値化されたかはともかく，学力試験や調査書の点がよくても自己表現の点で逆転が起こる制度設計になっていることは許されないのではないか。テレビの街頭インタビューで高校生が「個性の問題なのに点数をつけるのはいけないこと」と話していた。その通りである。平川教育長は「退任」会見で成果として「高校入試改革」を上げていたが、「成果」でも何でも無い，声を大にしていきたい。こんなものは早急にやめるべき！！

(本間英次)



▼またまた、しんぶん『赤旗』がスクープを飛ばした▼一方で、全国紙と言われる朝日、毎日、読売は、その後追いでしかない▼新聞各社が、スクープを狙って、しのぎを削っていた時代もあったが、今は政府の発表を、肉図付けしているだけだ。確かに細かいやり取り、権力闘争の裏面などが微に入り細に入り、記事にはなっている。しかし、事の本質は別の所にある▼それは、この社会のシステムが崩壊の危機に直面しているとき、その危機を立て直すことを見つめ考え行動しているのか、それともこの「火事場状態」に乗じて、公金を懐に入れようと知恵を絞っているのかを見極める力を、各新聞社、そのデスク、そして現場の記者が持っているのか、持とうとしているのかによる▼国民の税金を政党助成金として受け取り、更にパー券のキックバック裏金を集め、税金の官房機密費5千万弱を、自分の口座に振り込む政治▼もう終わりにしよう、との声が日本列島を包んでいる。さあ立ち上がれ！

2024/02/15